

咸臨丸終焉150周年を迎えて

咸臨丸終焉150周年記念事業実行委員長
咸臨丸とサラキ岬に夢みる会会長

舛野 信夫



幕末から明治という激動の時代を生きた「咸臨丸」は、太平洋横断という偉業を成し遂げました。現在に喩えるなら、宇宙へ飛び立ち地球に帰還する程の大冒険だったと思われます。その咸臨丸も、150年前の1871年9月、戊辰戦争に敗れた白石片倉小十郎家臣団401名を乗せ小樽に向かう途中、サラキ岬沖で座礁・沈没という運命を辿ります。以来、私たちの幾多にわたる探索・呼びかけにもかかわらず、今も静かに海底に眠っております。

私たちは、終焉150周年を期して、咸臨丸ゆかりの人々が集い、激動の運命を辿った咸臨丸を偲び、その偉業を讃えるべく「咸臨丸終焉150周年記念式典」並びに、その歴史を辿る「講談」を上演することといたしました。

私たち「咸臨丸とサラキ岬に夢みる会」は、木古内町内外の皆様のご支援を受け、特に作家合田一道氏や当時オランダ北海道人会会長松本善之氏との出逢いを契機として、また「咸臨丸子孫の会」の皆様のご支援によって、今日迄活動を継続することができました。私たちは、地域の活性化を願い、咸臨丸を核とした交流観光拠点を目指して活動をしてまいりました。かつては、雑草が生い茂る中に「幻の帆船 咸臨丸ここに眠る」と記した標識がポツンと存在するサラキ岬でしたが、現在は、5万球のチューリップと、アジサイ、ハマナス等が咲き、美しい景観を形成しております。

ここまでくるには、幾多の困難がありました。中でも、会長として私たちを導いてくださいました久保義則氏、事務局長として困難な仕事を一手にこなしてくださった多田賢淳氏、そして「咸臨丸子孫の会」との橋渡しとなって多大な影響を与えてくださった小杉伸一氏、さらには、花壇の手入れに尽力された港光荣氏、いずれの方も今は亡く、きっと黄泉の国で咸臨丸に乗船され、私たちの活動を見守ってくれていることでしょう。このような方々の命を削るような努力によって、サラキ岬の今があることを再確認したいものです。

明日からまた、新たな歩みが始まります。故郷木古内町の歴史遺産である咸臨丸を核とした活動を通じて、一人ひとりが誇りうる故郷づくりのため、今後とも活動をしてまいります。

私たちの“夢”、それはいつの日かダイバーを雇って、サラキ岬沖一帯の海底を探索し、咸臨丸の証としての遺物を発見し、歴史に新たな1ページを記すことです。

140周年の記念式典で、当時のオランダ王国大使から“今一度、咸臨丸に乗り込むうではありませんか”というメッセージが寄せられました。今日ここで、再び皆さんと共に咸臨丸に乗り込み、未来への進路を切り拓こうではありませんか！